



由 言葉下卷

友の吉の條に八種

形状言いつきてのすへての依陀

詞八衢上卷

ニ

活きまはへていとおかしくさぬかるす四種の

活とくも其ぬくひさまじひりくまとあるその四種の活き語

ぬくへて何くれと思ひ出るるもをは上のをちくよそとく

さめつらてうけ八ちまじく又次もたろ志あきあき又あきく

と活く語云といへる其二種の活き言もけり四種の活き次きておほ

く二種及有りといふ詞の類形なり言なりといへるなりいれらる

名目
なとそ思はるるさへ八衢四段と一段中二種の活きのやうも図か

をも移んてふしつらてし示してあまのく志あきあき

志きの二種はしるさう其説のちのちのりつて図るなりしりつてなれたるね
え八ちまうこし就きて其活きあまをえみんまへたしそをうけ活用抄よ
りて考へ又わらとのせし友鏡の五十二段の図れちり免なる方一乃
兩段つつき考へおほ其詞もも底廻影つとへむるを見てあるをし
さて今もその底の影は出してあはらる其詞もものりる中にもいと耳
とゆきまもりり又もそのつらひさぬを人によく誤るあり或もけや
く人のうらうらとけのめせし詞もゆけへりていふふそや覚申すあ
かしかうらうに初学徒のようせれもまをひぬへく思もるあそ
もを思ひ出るにまうせとれうまといけつとらうていふをいふん

〇〇志きれ活を志く志志哉の活は紛う事

古事記傳十三卷

上二

いふ志をいふといふも俗言なりといひ又
歷朝詔詞解四卷もすへてあしうかしくやしくなくいふも皆俗
言也といふもよしをいへそ其辨よく覚えおくるかくいふ故も
今れよれ人々のものゆるみは見るに世に名するそせんしやうたれ
文章もいひ世はとらるあしかははをいふといふへきこらう
をいふをいふと書くあやぬりをを清くまぬれさるをなし
とみやめんや世のういある人のさるもさのみ用ひさるはよた
哥もいふ文もいふつやのみのみおわらふよりてなり
さそり辨へたる人
すし古事記傳十一
三
考つ布とみるをいふといへる如く此言
をかうらう誰も俗言といふらるるおか

ふはきものこもまれくはやあう見えさうらふ事

字鏡ニ覽須牟也。志々に見えざるかとも後の人のうつしあやまざる
 こそいづらんぬ。しう此四種の活の中にもあつふる。つるへきことん
 づゝほるいさつらとつるへき処いぬちかといなることこの古事記又も統紀
 宣命みもまねに見えざるよ。ハちま。下巻多行のこたろ
 づゝあれらるを分け世俗言のさぬと全く同じい。へといへといかへ
 ての人れものいひのたうとも雅言よあうひていひ。ことたき。こそ
 あつさ。つゝとて書つゝた。いもあつその俗言よあせらるゝの
 づゝ。や又も後の人の写。ひらめ。は。や尚よく考ふ俵。い

海志時

詔詞解ニ麻自といふ辞を麻自伎ともは。とらけと麻自志とも注。つる

へてつゝ。うか。い。わ。か。といふ類志々といふもみを俗言なりこれ
 であつ。末之時とつるも雅言の格。とら。ら。如く聞ゆれともあうら
 五十八詔。例。つゝ。そ。こ。い。い。い。い。六巻。至りて末之自といふ
 あ。ろ。え。か。と。れ。も。例。も。つる。なり。四十五詔。已。我。得。麻。之。これ。を。一。本。
 麻之字岐とらける。よ。う。る。時。た。こ。と。全。く。同。言。て。意。も。同。く。聞。え。ら。り
 ち。う。れ。も。為。ま。き。い。ま。き。か。の。類。の。麻。自。を。古。言。と。麻。之。自。と。も
 い。な。る。と。つ。つ。免。又。六。詔。取。末。之。為。且。と。つ。つ。れ。も。堪。ま。い。と。い
 ての意。と。同。格。也。考。へ。合。は。へ。し。と。つ。つ。も。く。は。い。も。こ。ろ。ほ。き。な。り
 九。そ。哥。よ。み。文。う。く。入。も。か。う。わ。う。け。こ。ろ。に。意。を。用。ひ。て。う。け。清。少。納。言
 の。い。ひ。けん。こ。ろ。き。と。の。つ。つ。い。し。と。こ。ろ。さ。は。へ。き。と。ら。也。さ。て

うれ。きうか。み。ホ。け。め。も。あ。い。へ。る。志。文字もあ。く。く。濁
 れ。ぬ。う。く。は。や。し。い。め。ふ。大。う。は。さ。ふ。こ。て。あ。れ。く。さ。る。活。き
 の。志。文。し。を。こ。り。て。い。へ。る。例。た。え。て。か。き。に。も。う。く。は。風。を。と。た。し。
 〓 時。〓。〓。雪。を。あ。り。つ。時。〓。け。め。も。あ。い。へ。る。志。文字。万。葉。一。の。八。丁。四。十。
 丁。十。八。の。九。八。丁。三。丁。十。の。十。七。
 同。八。丁。な。ど。多。く。は。濁。音。の。字。し。て。う。け。る。を。見。又。此。詞。世。か。へ。て。も。と
 き。自。久。と。濁。り。て。い。へ。る。か。と。を。も。あ。ま。ふ。へ。し。ま。て。つ。い。て。い。へ。ん。状。何。く。何
 い。て。さ。る。よ。つ。き。て。い。み。う。う。い。ふ。詞。か。の。濁。ま。る。を。う。く。し。て。以。て。出。し。も。す。み。て。を。い。へ。く。や。う。な
 古。言。清。濁。考。と。い。へ。る。書。し。を。い。れ。と。ま。ま。き。の。文字。を。さ。ら。ぬ。の。う。右。に。け
 する。時。し。く。し。い。ふ。詞。か。の。例。も。あ。ま。い。み。し。い。ふ。詞。も。と。を。濁。ら。ん。を。う。く。と。さ
 た。む。へ。き。う。う。い。ふ。ん。や。近。き。う。陸。奥。人。の。あ。ま。を。書。く。あ。ま。の。詞。み。を。す。み。て。は
 る。く。と。い。へ。る。と。う。け。ん。も。し。同。じ。き。の。あ。ま。の。考。ふ。へ。し。
 又

つら。か。も。ふ。今。も。と。け。る。末。自。末。自。久。末。自。幾。と。の。み。い。ふ。な。る。詞
 を。か。う。し。た。末。之。自。末。之。自。久。末。之。自。幾。と。も。い。ひ。う。く。し。致。さ。て。と。れ。え
 今。つ。ね。い。ふ。と。も。あ。ま。な。る。詞。の。や。う。な。れ。く。活。き。ゆ。ぬ。を。さ。る。と。め。つ
 ら。し。き。事。な。く。これ。も。例。の。志。〓。〓。志。き。け。活。き。よ。て。常。に。い。え。お。り
 末。自。の。ま。ま。き。と。活。く。と。全。く。同。く。こ。と。也。が。く。こ。こ。に。あ。り
 う。れ。詔。詞。解。の。辨。い。と。く。は。し。き。き。ぬ。な。れ。と。その。中。に。末。之。自。を。意
 え。う。く。し。と。し。末。之。時。と。う。る。雅。言。の。格。よ。う。へ。る。如。く。聞。お。と。あ。い
 を。す。へ。て。の。精。か。る。よ。を。以。さ。る。こ。と。也。雅。言。の。格。よ。う。へ。る。い。く。あ。り。と
 か。し。麻。自。之。と。は。い。ふ。へ。う。う。ち。ま。て。く。麻。之。自。と。は。い。ふ。る。詞。の。因。由。也。と。ま
 ま。自。義。と。も。ま。ま。字。岐。と。も。ま。ま。時。止。と。も。あ。る。う。て。さ。る。活。ち。ま。も

かふもいと明かたをや

末自末自久も末之自末之自久も時自時自久もみな友かみれオ二段の図に入る詞もかり

なめし

日本紀に継射巻も孝徳巻も輕字をナメキと訓めらにようて續紀
かる無礼岐面幣無久とある無礼岐もかめきとよむへし是をかめし
幾とよむをよろしかり此詞をこれあしきをききかぬひの
活きよはうけに日ろきよれおと同一くして友鏡オ一段の図中
に入る活きなりかめしきといふも友鏡オ二段の図中に入るき予
なりてるなり

又

かめけといふまきよしきよしをきよげふうけかといふと同一

ことごと本よりうれしけれ。かといへるとは同かむねをかめ
しけ。とといふへくもむねぬ今人ともひき大かめしけ。かといへる
う上にかめけたかめしけと云ふこと親けるむを却て聞えに抑
中昔れよき書とも心つけはく見もてやくに此詞志志き云
方に用けりと覚ゆるをいふにあし蜻蛉日記にあるまひのかめ。
覚ゆるあとももの似は源氏所川ふかめけ。ゆるさぬとの枕
冊子に文詞をめき人こそはくくもなれ云大くはし對ひても
かめきたかとうくも云らんとかまらういし。又郭公をいとなめ
くうも声そ心うき。那といふ多し皆志きくとのみ活きたり
かこくれし

かゝるれしといふ詞

頑駭癡か
と二當る

志く志きと活らける例と

源氏にて末
摘花を止め

明石初音
あとで

固より多うる証あを又

くきとも用ける言あり枕冊子とい

みしう志とけかううくかくなゆしかりきぬかとおみたりとも

と見えたる形と

仲正集二くくあや後への園二若菜つみかまりけりく翁
姿よぐるも善く無きかこ同活ある例証ありもし志く

志きとのみ用けるあらんけ樂しや悲しやかをまのやうかや
といへん如くして不成語なりといふへき例なる証あふるし

うたてし

秋といへん心抱いしき宇多豆家ル花もあそへて見ましくゆりかも

たの
十三いとててくかんうは不
截用うててくゆれと枕冊
子かといへる古言と

も此例をみるふこれたたく志きとのみ活ら詞也今れよ人の志を
えまき志きと活

くくこつふた古へうかたをひさしやあろくよりこままうひりけるや宝物
集上金たててしきもの思ふかや忍二捨るあり抄集抄一アうて志きもの大名

利の二かりかもし見えたりさてついにいへん古今集うててをひの袖とあれ
系とみえらるなとも深くうちみたりをふ縁といふ格うらうらもは詞とて
くうてきこてうて志くうてしきとんむうしたいた
きりし一の証を此議と奥二長々しまの糸二審にまへし

いち志るし

志るしといち志るしと同し活きあるにあるしといふことらぢぬ

らぬといち志るしとゆふこそいぢ志るまきいち志るしとてやう

ことせらる事をうら見やあれもたといち志るまきいち志るしと活

くならと志るし

こまきたし

万葉集二卷二已伎太雲おとけける雲といふ借字をくは上二つきとを

はかまててよをものもつうへるなりあまをこれとまきくぬく

きこゝ幾と活く詞とあつたたり然るふ又統紀宣命ニ許貴太斯。伎意
 係伎天下乃事乎多夜須久行無とつるをみきたまは志く志きと
 も用く言とおもしるもしくく志きとも又志く志きとも
 ニくこゝ活きて意全く同き詞とすと猶ある也
上ニ出せる
 類の類也

やうやく

漸字ニつたる詞やうやく。何々はやうやく。志くせりつねしく
 さしくの用言へ連けいふをうしくの音よりうつるをおもふこれ
 をゆく、く、ま、と活くひとつの用言あらん但し一説にはや
 といふたゞ、もき城やうりといふも此詞の音便よりつぎとして
 しよそ、え、二ともよそもれる音あるをさして後又さしくそのう。

をえひとつたぐとしてやうやく。とはいふ也といふめれとらうは
 けし按するニ此詞をうなるう。えけお音便よそをれるうへれと後
 なるう。は正しくたぐ。といへるなるは音便ニ訛りたるう。なるへし古今
 集に相志まる人のやうやく。うれうこよ。又櫻を植てうりは、あやう
 やく。花さきぬへきとあよ。云猶挙るよへいいと多しあれをそあ
 る説は上ニすてにえらめる如くやくといふ詞の二さひくつれ
 たる者といへむとらうはあらし

とし 茂字ニつたる説

おとせある漢学者は問けるやう茂字をふるくよりも、まともみ
 習へるた字音を異しくよめるよやといへりしに卷へいひける此茂

をらめと然りてありこれとこれと俗ひつらるるさぬを似され
 ちとひもてう根を同しうぬをや 今の人のどのくまなく文章と
 てそのゆる詞つらひさうさうさう
 ちきりとならありよるをよるさうさうさうさう俗言よつてつめていへるより
 思ひまゐたるならんいへるよきあみもまきつてをまきといへるぬらひられ
 とそれと同一やうに意
 得へきあつてはあつて

すこし

ささしとまきと活くとおわちて漢籍の訓読ともの中
 二小少微等れ文字をさ訓み来たたるを珍しうぬ事をさく雅文
 までたすこしといへるぬみいとおわちてすこしきけあしとや
 ういへるをさく見えはさてうく活く詞ともをいへて用言へ
 何と何と連く定りありそはぬとへむおしくけすたのちく

見る悲と思ふとやうにいふ例あり然るゝ源氏桐壺と女みらるはこし
 けくしめへる帚木とけくし見てもや夕負とけくし物の心を思ひさると
 いへるあつてを考るふ此すこしといふ詞も其例さうひて聞申す也又
 てよをはのはもつあつてをえ截断言といひつらるるもあつて
 志の用言ともこれ例も同しからけ帚木巻とけくしはみせん又同
 巻とけくしつらり申せとせめらるとあるあつて皆例も異なり外
 のちとまきの用言もた嬉ははは。おひさし。つとやうに
 いへるいへるあつてあき也 たし言哥みみれたれ。あつていへるもたし
 といへると同しと截断言といひにさうさう
 今今いへるもたしと異也
 聊つ聊つ聊つ あつてつねいへる はささき用言といひまきさうとも思

へくた^ハ海^ハ志^ハき^ハの活^キ言^ハある^ハら^ハし^ハた^ハ字^ハ鏡^ハ二^ハ伯^ハ小^ハ白^ハ須^ハ古^ハ志^ハ
支^ハ奈^ハ苗^ハとある^ハら^ハし^ハ知^ハる^ハへ^ハし

おほき

あれも活^キはま^ハま^ハさ^ハの^ハみ^ハ異^ハか^ハる^ハい^ハひ^ハこ^ハも^ハか^ハり^ハれ^ハと^ハ今^ハあ^ハら^ハの^ハ
つ^ハい^ハく^ハふ^ハい^ハま^ハん^ハお^ハほ^ハき^ハし^ハとい^ハふ^ハ詞^ハあ^ハり^ハお^ハほ^ハし^ハとい^ハふ^ハ詞^ハあ^ハり^ハと^ハに^ハ
た^ハら^ハら^ハぬ^ハを^ハく^ハ志^ハ幾^ハれ^ハく^ハよ^ハそ^ハう^ハれ^ハか^ハめ^ハし^ハう^ハこ^ハて^ハし^ハか^ハと^ハく^ハお^ハほ^ハ
し^ハこ^ハぬ^ハ也^ハあ^ハて^ハ今^ハも^ハ大^ハく^ハ二^ハ共^ハあ^ハら^ハつ^ハれ^ハ日^ハう^ハれ^ハ漢^ハ字^ハ二^ハら^ハて^ハ見^ハる^ハに^ハ
お^ハほ^ハき^ハし^ハた^ハ大^ハ字^ハあ^ハら^ハら^ハう^ハら^ハう^ハお^ハほ^ハし^ハた^ハ多^ハ字^ハあ^ハら^ハら^ハあ^ハら^ハる^ハや^ハ
う^ハな^ハり^ハ然^ハき^ハと^ハも^ハも^ハく^ハお^ハほ^ハく^ハお^ハほ^ハく^ハお^ハほ^ハき^ハとい^ハへ^ハる^ハ詞^ハも^ハあ^ハら^ハ
大^ハ字^ハ二^ハら^ハら^ハら^ハは^ハく^ハ古^ハ語^ハ二^ハは^ハ少^ハく^ハ二^ハん^ハそ^ハも^ハく^ハ小^ハ少^ハの^ハ字^ハ二^ハあ

たる^ハ詞^ハ二^ハむ^ハえ^ハる^ハを^ハう^ハけ^ハ大^ハ字^ハ二^ハあ^ハら^ハる^ハ詞^ハお^ハほ^ハし^ハを^ハ三^ハつ^ハり^ハ一^ハは^ハお^ハほ^ハ二^ハ
を^ハお^ハほ^ハし^ハ三^ハは^ハお^ハほ^ハき^ハし^ハ共^ハら^ハり^ハあ^ハら^ハの^ハ中^ハ二^ハも^ハく^ハめ^ハれ^ハ○お^ハほ^ハし^ハを^ハ二^ハ
む^ハら^ハふ^ハ詞^ハ二^ハも^ハく^ハも^ハ大^ハ小^ハの^ハ二^ハ字^ハを^ハお^ハほ^ハし^ハを^ハと^ハ云^ハふ^ハあ^ハつ^ハへ^ハき^ハ也^ハ
又^ハこ^ハも^ハむ^ハら^ハり^ハ小^ハ字^ハ二^ハら^ハる^ハ詞^ハ大^ハく^ハこ^ハを^ハい^ハふ^ハら^ハら^ハう^ハく^ハそ^ハを^ハこ^ハとい^ハふ^ハも^ハ後^ハの^ハこ^ハと^ハなり^ハと^ハお^ハほ^ハし^ハり^ハれ^ハと^ハあ^ハる^ハ
中^ハ二^ハは^ハい^ハと^ハふ^ハら^ハく^ハよ^ハり^ハこ^ハの^ハみ^ハい^ハひ^ハて^ハを^ハと^ハい^ハふ^ハあり^ハし^ハむ^ハら^ハふ^ハか^ハき^ハう^ハも^ハら^ハふ^ハに^ハ
又^ハも^ハい^ハく^ハか^ハら^ハむ^ハら^ハへ^ハる^ハも^ハら^ハう^ハを^ハは^ハ大^ハ少^ハ二^ハ字^ハ二^ハあ^ハら^ハる^ハか^ハり^ハ皇^ハ子^ハを^ハた^ハく^ハる^ハ
て^ハ大^ハ兄^ハと^ハま^ハを^ハし^ハ近^ハ臣^ハを^ハ少^ハ兄^ハとい^ハふ^ハぬ^ハく^ハひ^ハら^ハれ^ハなり^ハを^ハ二^ハむ^ハえ^ハる^ハも^ハ大^ハ舟^ハ
オホエ 小^ハ舟^ハ大^ハ川^ハ小^ハ川^ハあ^ハら^ハの^ハ類^ハも^ハな^ハら^ハう^ハさ^ハて^ハ次^ハ二^ハ○お^ハほ^ハし^ハた^ハお^ハほ^ハく^ハお^ハほ^ハき^ハと^ハ
活^キて^ハこ^ハれ^ハを^ハい^ハて^ハき^ハとい^ハふ^ハ詞^ハ二^ハむ^ハら^ハふ^ハ
その^ハの^ハい^ハふ^ハき^ハも^ハ小^ハ少^ハ微^ハかな^ハ何^ハれ^ハの^ハ字^ハ二^ハら^ハる^ハ又^ハい^ハか^ハき^ハこ^ハ
い^ハふ^ハ詞^ハ二^ハむ^ハら^ハひ^ハて^ハ大^ハ少^ハの^ハ二^ハ字^ハ二^ハら^ハら^ハふ^ハ
和^ハ名^ハ抄^ハ二^ハ小^ハ史^ハと^ハき^ハて^ハ須^ハ奈^ハ伊^ハ佐^ハ官^ハと^ハ注^ハせ^ハる^ハ少^ハ史^ハと^ハき^ハて^ハ須^ハ奈^ハ伊^ハ佐^ハ官^ハと^ハら^ハう^ハし^ハを^ハの^ハち^ハに^ハ
写^ハし^ハ誤^ハせ^ハる^ハか^ハら^ハあ^ハら^ハる^ハし^ハ大^ハ納^ハ言^ハ少^ハ納^ハ言^ハの^ハ大^ハ少^ハを^ハお^ハほ^ハい^ハす^ハあ^ハい^ハく^ハむ^ハか^ハと^ハこ^ハれ^ハ也^ハと^ハて

又正従の字をおほいひろいとよむも大字廣字の義かるよし天武紀よみ
 えくまて十四年云々毎階有大納言大辨大史かとのおほいと同一とおと、例ゆる
 うへひろいのいえまふくかくく志と活く語かれおほいカい
 もそれと同一く志の活かるへき事准へてあるへし萬葉七夏影
 のねやれあふて衣つづきもうまけてさうためも差大裁をや
 ヤオホキニタテと古点かりこ哉ヤ、オホニタテとよみ改むれと今思
 ふこヤ、オホクダテとよみておほきにの意といふへしさて後○おほ
 きしたこせも活きをおかしさぬおほきくおほきと活きてわれも
 ちひさしといふ用言よむる詞かきけまゆく大小の二字にあ
 たるこれえつひといふたかがるらういさうりもまきさるる毒か

しおほきやうあるなくいへるも此おほき 此おほきといふときれたうめなる
 おほきれしけらうくうこれかり
 きえ活きの音はうらてちひさしのされ如く若後つるきおほ
 くとくとも活きて小のくきと活く音なるう如くなををおほ
 きといふをちひさきといふよむへていふぬひをさうらあり事
 の紛まころとさといふへし問大政大臣の大字かとおほといひ大納言
 乃大とおほいとよめるをいうる答これよてあるへしおほいとのまうはち
 とのおほいのいとおほきしのきよをうらおほくおほしおほきと活
 くをうれき文字あることいふく明うかりさて活きの音哉そへて
 おほき何といふも大オホキを用言よつるなりおほ何といふを深し淺し
 かとをたふらみどりあさ瀬あといふ例よて下なる活きの音はは

かりて下いへるみとり 瀬かよとそもるえらみ此詞あるのみ也ふらき
 緑あさき瀬とやうにまさしく活うしていへるとも同じかりて大舟
 大川かよの大えふらみとり ちさせあとのふら あさの例なりとさるへし
 又おほ おほき

おほ何とあるを おほく おほ志 おほきと活くその轉声をさふらる方
 といへるなり ふらみとり あさせかよ あさき 又をに對すは詞のうごこ
 て之るあり 上は大字よりなる詞九三なりといひし 此は舟大川かよをふね
 小川に對せるなりれそふらみとり ちさせの類のふら あされ例はちり
 又大兄のおほむをくか兄むらひてこそおほく おほし おほきと活く言の
 その轉声くおを省けるかきえ深みとり ちさせ瀬の類はふら あさと同じ

例とそ別ゆる此あつれちちめ其処々て意つけは見え本よりい
 きちりしくてをわれぬて又おほき何とあるもその發の音み連躰言
 かるなり又然らざるなり おほきみつれちちかよといふおほきえき 文字
 連躰言也 おほく おほきと活きてそらちひろく ひろきと活く言し
 てひろいこのちちかよといへるとたへせをわす これ正從の二字に當り
 とそのこの意をことと大
字の意をへある
 より出たるあり 又和名抄に溟渤の注に於保岐 宇三とちる此おほきなりと
 ちひさにむらへるといへるゆる おほきく おほきし おほきと活くその
 活きの音けさふられたるよて此岐 文字もこれおほ 舟大川深みとり ちさせ
 のほかきと同じくして活用れる音はちりさるかり此あつれけち
 免も其詞との出る処々て意をつけみまをまきちりく志くお

とけらる言をうくひとりの躰言のえらみ詞といふときも截断言
 こそいふ定りあり ある書にかうく一夜をひらちもねんといへるを注してま
 うきなりよこそいへりれといへるその語格をまぬけり
 古今集に神とよらぬむか。煙とある万葉うか。妹かといへ
 て古書とも例あるとへいとおほし常もわか。人おか。幸
 かといふ同。の。もむか。うか。れ。もみま。まきと活
 く音なり

何けく

ある書に何くといふを何くといふも古語にてよくをよけくといふ
 をいへくといふもいふかるを露くといふのみとあへ例なき
 詞ありといへりけ長くを長く安くを安けくよくあへくを

よくあへくといふもやうにいふも古語のさぬ也也てよけくといふけくか
 とはよくいへくといふ詞あるを露けくのみを露くつゆきかと
 たいえぬなれ右の説とくは意あひひせるこそけき説といひ
 ふたき也也と古へも今も何くとのみいひて何けくとはいへる
 くよりもいへるりんと覺なきもいり又何けくとのみいひて何く
 とは古今ともいへるおほしき詞ともすくあへる可い
 ふせくおとをる。いふせけくとやうおもひひくものとも思ふれ
 け敷類も多し又平しく明けくのくあはみあらく。み活きて
 のみ活きてたひくくきくのとくともやうにいへるころやう
 覺ゆすへて何うにいふ詞とも 平らあきく
 うのしうあき 皆何けくとのみ活きて

何くとはいへるうとおもはるたしうけ露くもつゆ。いといた
さるかまはれれえ又聊異なる例といふへして其うらもて何う。

二何うあるとのみいひて何れくとははさういふあるもつり

おほらうかとの如し まつりくおほらうくとあううたいたは但しこれらとあるくは
さしいひしものうてあさう。あるといふ詞を古事記のあ
たふきしよむへき処のあさう如き也といはんうされと古き処ありとてあさうちよ可
爾可あるあといふことなうと思はんやよろしくさきこて万葉かとりてうさ
らう幸也さて何うとのみいへりともある詞あるた何れくとのみいへりて覺き又と
その二くことしよふと見えざるもこれうきとあるきつれとあつういふうた
のつうひの古書ともは残まることそれれ
さやうと差別あることやうぬももあるへし

又 づく何やう何らうれ類

万葉集ある れむやづく 残と き つね を す み や う と い ふ 加 ル を 希
久と云そ古言の格あるといへるときこもあめりそれをふと見てはへて

明らかく か と い へ と 古 言 明 ら う ふ と や う い へ と 後 の 詞 也 と か こ か し

う意得る事あり 日本紀二曲をツヒラカニとも又ツヒラケシとも訓る処あるをその
ひとことえらうしといふへくもあはれ又その一方よはとて古

事記夜見段ある具と黄泉神相論の具字をツヒラケクとよまんと宜くまうくこち万葉十
九十一都婆羅迦途とある一證してツハラカニヨモツカミトアケツラハムとよむをかほうとす
きかを は へ て 何 ら う と い ふ 詞 あり つまひらう
のあひい 何やうといふあり
おこやう
これにい

つま い ふ つ り のひやうのひらう
らあひい
又らういよああり
なを又何れう二
つらう

うある つ ら う のつらうのあひい
またうのあひい
これら の 事 と い う あ る ゆ ゑ ん の 事

りて意得て古きを ま は り て な ま し ひ よ う れ を み て ま の
まを お い これ と い て な う れ を さ こ め て よ や 世 と え い ま の あ や

あき詞つらひ歌あつてきけうよやくきまみくらやある見えあうへるを心
くろくきこもあうらうし

又何ぞ何ぞ

世中のうづく。うづきぬ古今。あうづく。色をそめつ貫之。山下風の寒づく集。に
万葉一はつくとねのよづくを見れ万葉。九九かると集。尔乎の辞してうづく。常
うれきをかうづく。まんうき。うぬへぬとやういへると異なる。つぎ
てはやくいひゆるやうこれみか何づく。うるを何づくあるふといふ
るきを省きいへるものからんとのみ思ひしと宜しかうりなり。今つ
く考る。此何づくといへる。うづ。斥言を射言といひか例。やと賞
き多し。あるは此くとも連用言かきと聞ゆ。これと今考へていふありはやく
の考へら上よいへる如く。

寒づく。あは例の連用言かるのみ。うづく。寒くといへる。異なる。うづ。かうへ。あれと。尔乎と
うづく。あるといふ。うづく。の省れ。うづ。ものと思ひ又古事記傳十九十九。初久を伎と云む。如し伎
ま久を古言。初久と云ふ。多しとある。依てきの延。うづ。は。き。か。れ。其。を。う。づ。と。云。ま。き。の。ま。ま。
轉れるのみ。い。なるへ。う。う。う。考。二音の考。四音。轉れる例。外の活。う。も。う。る。事。故。今。も。う。づ。
世中のうき。うづきぬ。やう。に。云。る。意。へ。か。る。し。思。ひ。た。り。き。此。し。ら。詞。通。路。を。み。れ。え。そ。の。
書。も。う。づ。と。事。れ。あ。う。け。か。と。ま。き。の。延。を。う。た。る。あ。り。と。の。み。あ。り。され。と。や。う。な。う。づ。
も。う。づ。万。葉。あ。る。も。み。ち。葉。置。白。露。の。色。は。も。出。し。思。へ。と。事。の。繁。家。口。い。へ。る。と。内。し。
語。勢。同。書。七。泊。せ。川。流。る。み。を。の。せ。ま。ま。み。あ。う。る。浪。の。音。清。久。と。い。へ。る。が。か。た。く。た。
固。う。づ。の。ま。へ。か。ら。う。づ。あ。う。づ。と。結。い。を。る。を。み。る。う。づ。と。長。く。の。う。づ。さ。む。の。む。づ。
と。い。へ。る。同。う。づ。と。て。さ。や。き。う。づ。と。み。る。へ。く。も。あ。う。ぬ。あ。又。い。と。閑。え。う。づ。と。さ。か。る。を。
思。ふ。へ。し。か。何。い。ま。う。何。そ。う。よ。や。う。と。い。へ。る。え。よ。ん。き。と。う。づ。と。み。る。へ。き。さ。あ。た。れ。と。其。ほ。づ。
き。あ。る。み。と。れ。て。あ。れ。あ。う。づ。も。あ。う。づ。を。あ。う。づ。も。あ。う。づ。と。ま。て。を。あ。う。づ。と。閑。え。う。づ。
き。非。や。を。玉。緒。又。此。く。を。う。づ。と。の。ま。へ。う。づ。も。射。言。へ。連。く。は。例。の。き。字。の。方。
あり。う。づ。る。ゆ。ゆ。恒。の。く。き。の。活。き。異。あ。う。づ。と。う。づ。み。か。し。その。射。言。へ。連。
は。う。づ。る。も。万。葉。三。五。岩。戸。破。手。力。毛。欲。得。手。弱。寸。女。有。者。為。便。乃。不。知。苦。か。と。い。
へ。る。う。づ。と。あ。る。へ。し。然。ら。は。問。え。ん。尔。乎。の。辞。と。射。言。へ。連。く。活。き。を。受。る。す。へ。て。の。

ぬのはまうゝとと思われ安々かくくこのかくを無きと活く詞のたと聞えてその安々
 らを用以て入るとの安々を射して入るのよとまわれううて女々といつれも
 キコトとたよてみまてよく 但し右に擧ぐる清けかたをかくくさむくたこと
 通ゆるやういふはあり 例にてさむくかうかくかとの例に少し異なるかと
 乃ゆふなうて乃ゆふを證ははまゝもつゝしとやうに思ふ徒
 しつるゝあかみせん人と万葉十四神かひのあさく原のをみかへし
 思へる公之聲之知家口とあるかと試みて明めよらし抑形状の何く何うく
 といへるえうく射といひかせる物たるよりてこそ乎尔毛乃かとして
 受けも一乃何かの結びともせるよとあるなれさて又此何くを何
 ぐくといへると同一ふもむきよ何ぐくといへるとも古くをうりしや
 万葉十四卷^ハ梓弓よられ山への之牙可久爾いもろをこてらひとまふ

もと見えたりたらしあも可久といへるのみこそうきしとはあつて
 活うぬさぬ也 又女類と外にみえされ右の哥の可久を可牙の誤か
 らんとしりふれとありあううを何考へし
 又 何ぐく 何さく 此類
 古今集^{雜部}見きとをかひそ人のきうく^ハ 女うくやうは作用四段の活
 の連体言とある久をのへるよとて上のをちよいへる形状の連用言をのへ
 るる志やうくこのうくかとも同一くうけられもすへて加佐多波麻
 羅四行とも四段の活語の才三音を才一音としてそれよりくといひ
 のまへする詞ともちうく^行 まをきく^申 きく^待 いきく^曰 ぬひすく^籟 かくら
 ねぬきハ少うぬ例也 但しこれもく文字は射といひを
 せらさぬといへり人のきうく^ハ 申給うくと申はたとえうて 聞く^ハ

給ふとをのちへる也とみてたゞふとをなれとちるくのいさゝの。○
事かゆく思はく。○よりをかといふかるえい。○おま。○ふ。○ふ。○あ。○
ひて同いさ。○ふ。○おま。○ふ。○いへるは同一。○つ。○
り。○見え又々。○ふ。○ふ。○みえ。○た。○ち。○か。○れ。○れ。○と。○あ。○つ。○詞。○通。○路。○
つ。○ふ。○ふ。○ふ。○を。○み。○へ。○く。○は。○其。○母。○か。○る。○も。○古。○書。○と。○を。○考。○へ。○て。○准。○へ。○る。○へ。○い。○

か。○り。○く。○し。○夜。○か。○と。○諸。○活。○語。○の。○躰。○言。○へ。○つ。○づ。○れ。○る。○所。○

た。○り。○く。○し。○と。○ち。○く。○志。○志。○志。○と。○古。○き。○て。○友。○鏡。○才。○二。○段。○の。○中。○に。○い。○る。○へ。○き。○用。○言。○か。○

り。○お。○ち。○よ。○お。○く。○き。○と。○活。○く。○用。○言。○と。○も。○友。○鏡。○才。○一。○段。○に。○
置。○せ。○る。○れ。○也。○を。○う。○あ。○ね。○詞。○を。○ぞ。○せ。○い。○

ふ。○を。○り。○と。○ち。○く。○志。○志。○の。○活。○き。○と。○導。○る。○こ。○と。○す。○へ。○て。○は。○こ。○り。○て。○の。○定。○格。○也。○近。○し。○

遠。○し。○深。○し。○淺。○し。○か。○と。○皆。○近。○く。○遠。○き。○か。○と。○活。○く。○は。○さ。○ね。○い。○ふ。○を。○り。○と。○ち。○り。○く。○

し。○と。○ち。○く。○し。○く。○あ。○さ。○く。○志。○志。○と。○や。○う。○い。○ふ。○その。○志。○く。○を。○用。○言。○へ。○連。○く。○言。○ふ。○

て躰言へつくと必志きとのふくにてたしとのふも截断して下へつ

うぬにさしまれることいづこの格たるをその截断言なりし文字より躰語へ

つねるる如きこといづる故それをいづるを覚ゆる人もあめるもそれ

又例 格例 此の如きことを志るぬら也外の四種の活きともして連用言

を躰言ともいへてひとの躰言といひたれどもよくひてを此形状言に

てを友鏡の才一段あるくきのともその活きの文字ともをふける

のふかるを友鏡才二段ある志志志のつとてを志文字をへるま

こいへる例也 妹なと されも 何々し 何といへると 何々しき 何といへ

るとは固より和きある事也 竹をいふとき竹とやうにいふとは同一

をとれる詞とてこれあれ三代實録の童謡と雄々伊志岐耶とある

枯木といふ後の事なるへし古事記二舟の名の枯野をうぬとみゆることなりて枯山枯
 樹をともう。山く。樹とのみよむへしされえうれてある樹のこくちのきとよを
 正しとすへしといへるも又却りて精しうぬこと也枯をうぬといへるも本た
 る。入るうぬと下二段は活く詞の連用言をて解語のさぬよりれといひすまきてあて
 れををら。とゆること共事を共書上巻にいひつるむれむらけむまの例天地のあめ舟
 稿のふねいねといふ音声と同一ことなるを言を連ねよとまはまふか。いかにあること
 くそくををら。といふ。其例にて此く志きと活く詞と志くし志きと
 なるもやありや。活く詞をうつふとのうへもおのつらなる定りある事そ其より上
 といへるを今も猶ほまひらうふせんま。長く。長きとやうは活く
 詞にてもはへてその活きの轉声をのそきさりて近くける隣りかれ
 ち。とありといひ長くける夜の事あれをかうよといひ深くなれる
 縁あせをふ。み。浅くある瀬かれをあさせとやうといひ又志く
 志きと活く詞とく。悲しとある妹をうれ。い。空しくあり。と

煙をむか。い。か。か。く。く。く。人をおか。人ともうに。例あり古
 事記。賢。女。麗。は。し。め。万葉。は。し。め。可。隣。妹。いと。か。と。引。出
 る。と。へ。い。い。と。お。ほ。き。み。か。同。例。て。是。を。す。へ。て。志。く。志。き。と
 活く詞のうけたり。と。定。格。なる。を。い。う。て。か。う。く。し。よ。とい。へ
 る。の。み。を。を。あ。や。み。め。へ。き。但し万葉なる永長夜ありきかうよとよか
 さいよめをよきめぬへれとそを作者の意ありさるへくあうくしよとよむ
 二はあはれおとれりさて今たうれ哥のあめめはあはれまへてくれ。妹むかし
 煙かをと不成語なるやう。を。あ。や。み。め。へ。き。を。あ。や。み。め。へ。き。を。あ。や。み。め。へ。き。
 いふを不成語也といふま。き。と。こ。う。り。を。よ。く。と。き。ま。へ。た。り
 ち。か。る。徒。た。う。り。猶。正。き。は。う。か。ひ。か。き。説。を。あ。つ。る。人。あ。り。て
 いへるやう。た。い。も。む。か。し。き。が。あ。り。と。い。ふ。へ。き。を。せ。う。れ。し

いもむあ〜せありとやうもむう〜はいひ〜とて全くおかし
 事ありかり〜あき夜といふへき処をかり〜しよといふも同じ
 こ〜也といへるも猶ありぬさありいもんちういゝる樹といもん
 もうあ樹といもんもす〜く同〜こ〜いひおつる葉といもあ
 ち葉といふも同くあき竹といふもさく竹といふも異なることあし
 といもんちう如〜抑おのつうある詞の〜規矩
 のて彼〜く志〜と用く言のその轉音の文字ともをのそきて
 いへるい〜ぬあ〜ひてた此志〜くし志〜きと活〜く詞〜てを何〜しと截
 断言〜ていへるあ〜とら〜さ〜らりそをまつ〜くきの活〜てたねよ
 け〜みあるとやういへる処を志〜く志〜きれ活〜き詞〜てををり

らはを〜け〜もあるうとやういひ又風をい〜み里〜か〜あとい
 へるあ〜くひ〜た〜ひて々名をむつ〜み君〜や〜さ〜しみとやう
 といひ又うれ〜てたよ〜れ〜ろ〜れとやういふを〜れ〜てた
 とい〜れ〜よ〜れ〜とやういふ又よ〜あ〜ろ〜あ〜い〜あ〜あ
 し〜あ〜か〜あ〜あ〜い〜あ〜と又よ〜う〜ん〜き〜よ〜う〜ん〜あ〜と
 う〜ら〜は〜し〜う〜ん〜か〜と〜又よ〜う〜ん〜の〜ろ〜め〜とを〜ろ〜ん〜の〜類〜と〜れら
 皆あ〜ら〜ゆる形状言ともの二種あるうへめておの〜く〜は〜定りて何〜語
 格のおのつ〜り整り〜て爰〜其例〜さ〜へる如〜くみ〜え〜るをを〜あ〜く
 覚え〜に此趣を〜た〜な〜何〜今〜ひ〜〜ひ圖〜は〜ら〜を〜してを〜つ〜け〜ら〜た
 せん
ちるたああり〜と〜しといふ人あ〜は〜れと初学の爲〜た〜た〜此形状言二種
 のみあら〜す〜へ〜て〜四種の活〜きのさ〜ぬを〜も〜い〜よ〜く明〜う〜を〜ら〜し〜め〜んと〜て

段二中	段一	段四	キレク	キレク	躰言
老朽 人木	居鑄 井所	祝破 詞竹	長空 夜煙	長深 夜緑	
(イ)(チ) 樹馬	(井)(イ)	(ヒ)(キ)	(シ)	(ク)	
イチ	井イ	ヒキ	シク	ク	連用言
おいち	みい	いさき	あしく	あうき	
あま	あま	あま	あま	あま	
あま	あま	あま	あま	あま	連躰言
あま	あま	あま	あま	あま	
あま	あま	あま	あま	あま	
あま	あま	あま	あま	あま	已然言
あま	あま	あま	あま	あま	
あま	あま	あま	あま	あま	

下は... 上の... 下の... 上の...

此にて知へしさて形状の二種活語のみと就て上よりいひつる里遠み 寢て
下よりいふをうけ其格りをまきと圖示に倍し

段二下	段一	段四	キレク	キレク	躰言
植瘦 樹馬	居鑄 井所	祝破 詞竹	長空 夜煙	長深 夜緑	
(エ)(セ) 樹馬	(井)(イ)	(ヒ)(キ)	(シ)	(ク)	
エセ	井イ	ヒキ	シク	ク	連用言
あま	あま	あま	あま	あま	
あま	あま	あま	あま	あま	
あま	あま	あま	あま	あま	連躰言
あま	あま	あま	あま	あま	
あま	あま	あま	あま	あま	
あま	あま	あま	あま	あま	已然言
あま	あま	あま	あま	あま	
あま	あま	あま	あま	あま	

あま... かい... かい... かい...

貴さ賤しはあはれへて友鏡の才一才二両段一入へき詞ともは悉く此
 図に當て、見へし其中(カラリ)の加文字を清みもし濁りもすへき詞
 によりて清潔ともいへるなり
貴うろ賤しうろかてんて
 意の然るをいへる詞とも 又濁るかこよ
 といはぬぬ致とおほしきあり
長うろ空しうろかてんてみる
 物図のもの其形状を語る詞とも さて右の二

圖として形状言とも有やうはあらなりはへての用言は考ふへくう

志樹さき竹な^くう^ろる樹はく竹あ^く乃けち免^はあ^れら^る形

状言^てもあ^りよ^あり^くし夜とやういへると長きよ^あり^く

しきよ^あり^くやう云とのく^く言^ことも云ま^き又不成語也か^と

えあ^と云ま^した趣をもよく覚るへき事そ
か^は次^のあ^らは^した論免
 ことい^て明^かへ^し誠^や判

り置^へきことそ有つれ(カラリ)の加文字清めるをりれラリルレは友鏡才五段の用き也
 濁るをりの才四十六段の也。てきることる。てきることの別あり意えお^くへし

あ^らは^した

あた^らは^した詞を惜の字^はあ^らは^したも新字^はあ^らは^したも
又あ^らは^した
 ことい^て明^かへ^し誠^や判

く^あき^く活^く語あること^はあ^らは^した論か^し
雄略紀^に三^丁阿^多羅^斯杖^律能^陀
 俱^弥とい^はる^る類^おほ^した^る惜^りく^く

然る^に上^りい^へる如^くあ^らは^した煙^の類^とあ^らは^した何^とい^はる^るき

例^から^に古^事記^の仁^徳阿^多良^須賀^波良^もあ^らは^した昔^まめ^もい^ひ日^本

紀^も雄^略卷^三阿^多羅^斯杖^律能^陀俱^弥夜^もあ^らは^した墨^羅も^見え^たり^され^た中

昔^も後^撰のあ^らは^した月^と花^とは^あら^はし^たのみ^いへ^りさ^ても^れふ^らみ

ころ^かう^夜あ^らは^したの例^とあ^らは^したも^らた^らく^あら^はし^たと^活く^語比

さ^ぬか^らう^非は^や
新字^はあ^らは^したの^あら^はし^た何^と例^の如^く
 の^みい^へる^あら^はし^たと^論る^もあ^らは^した とい^はる^るけ^しふ

られ^し例^とあ^らは^したのい^ひさ^ぬと^聞ゆ^はま^とあ^らは^したとい^は詞^くあ^らは^した

きと用くべしとは更と思されられよつきておもふも無しを清し
 近しかと同くくまきとのみ活く言おれさうけきよ。瀧ちろ。
 隣かとの如くお何といひ人名たくと何ちろ。何きよ。あといふ例よ
 らは何かとのみいふべき例ある。友か。ちろ。またし。か。まな
 といひ又の或を尔の辞とて志。文字をうらて何か。よ。これあ。の。云
 とやうともいふえはへての例。異也。すへの例よれも何あ。の。何か。よ。の。みい。あ
 しと。轉の如くいふ。イ。韻。ま。す。へ。何。の。い。か。と。も。
 お。何。き。と。あ。る。よ。し。て。ま。い。ひ。つ。る。事。考。合。成。し。あ。れ。ら。え。い。し。し。や。れ。あ。る
 変例といふものこそそれとてそとよ又おのつう。ある定りれあ
 る事なり然る。たぬ。か。る。変例のある。み。て。は。へ。て。語。格。と。い。ふ。事
 え。も。か。き。て。也。と。あ。ら。う。き。う。定。て。み。つ。う。深。く。考。あ。ら。む。の

あく。と。ち。る。その。ま。き。さ。う。し。し。へ。て。可。と。さ。う。か。り。詞。も。何。と。た。く。あ。ら。依。こ
 する事也。か。い。と。ん。と。い。と。う。さ。う。な。る。ま。ち。と。い。ふ。へ。し。か。何。い。と。く。と
 いふ用言のき。こ。と。活。く。よ。り。か。せ。ま。起。を。お。き。お。こ。と。い。ふ。へ。し。と。い。ひ。往。
 の。い。か。ん。い。と。活。く。よ。り。み。れ。と。兼。さ。う。あ。ん。う。と。や。う。も。い。ふ。へ。し。と
 して。よ。う。と。ん。と。の。う。え。よ。思。ふ。へ。し

むかへ何きむか何といへる類あるこれ依呪

上。こ。い。へ。る。如。く。あ。ら。と。あ。ら。何。と。い。へ。る。の。み。故。々。此。詞。に。限。れ。る。む。と
 つの例といふへられむか手といへること。もうり
天武紀に徒手代傍訓。太平奈
天とある。傍訓をむか手と
きこそと評する人もあり。めとムナテの例をみてもうらるあり人の乗たるぬ車をむか車と
りふこと何とこれの書さる。こみえこと。拾遺。と。物。名。も。も。麻。鳥。飼。の。す。こ。か。く。よ。つ。か。き
 大の離れていらむか。ま。つ。ほ。と。あ。れ。を。徒。手。を。
 むか手と訓る。あ。ら。も。固。より。あ。ら。ひ。あ。る。こ。と。に。し。を。
 これらも必むかへ手といへ

き例ありやといふことなむあ〜〜むあ〜きといふ形状言のひこ
て空字かといふ 躰あ〜る詞をいふをりもあはむか〜とそいふとあは〜〜て神代

紀二の亦不得利空手来歸とらる處ムナシテと訓めりうくてそくのむか〜。煙又

とみえたるかとなひころをひてよまへき六帖三のいせの海の渚よれる

あ〜〜むあ〜きと活く言といへるよまへて別〜むあ〜といふ詞のあ

は俗コレマレムダコトあ〜りふ此 是あるへし水とて入江のまこもりくねて

むあて〜すま〜る五月雨のしる山家 とよめるか〜ぬあまへしむあ〜く

い〜ん〜り〜と公利車い〜る手〜みる〜とすれりさくきを賢木とくけるか〜とふとみれ

たさか。木とあるへく思えられ〜こと榮木の二字の意ある名〜とあ〜〜く借字せるを

りされと坂樹〜もろるを〜しこの外〜もあは
すれ〜〜と〜い〜る〜を覚ゆるも〜やあ〜〜も
りみう〜〜に〜へての格 志〜志きと

活く言〜も〜くきと用く語のその轉声をよける〜同〜きか〜を截

断言の何しといへるか〜た〜〜上〜あ〜とせらる回〜て明なるをや

みあほ〜

みうをしといへるこ〜万葉〜多〜
六卷山みれた山も見銀石さ〜みれを里ハす

十八卷一見我保 あれをみま〜け〜き也といへるふるた説〜ろくはあ〜

流〜今むときあみ〜ぬうふ考ある〜みま〜わ〜といへるはみをた

あ〜てみる〜用言〜ていへる也見うほ〜も見ををた〜てみる〜躰言

〜あ〜〜ていへる也又みま〜くのま〜た別〜ひとつれ用言也さて此見

〜き〜とのあひ〜さあるうその〜似たるて〜ををたれ〜あり万葉

集一卷〜山みれを見の〜と〜くあ〜いへると同〜さ〜と思〜ふ

されたみう〜とみま〜け〜と〜同〜とみていとある〜

みろほ〜といひ〜世うつりてをみまほ〜といへるものとも意う
 へき〜ろ〜に但しきろ〜はみろほ〜とのを仁徳見ろほ〜君万葉
 みろほ〜みおも和九卷かといへる〜あるをみろほ〜きのみろほ
 〜き君とやう〜かくてをうあひかた〜ろ〜はやといふ〜れをみ
 うほ〜のほ〜をほ〜き〜い〜てを射言へつ〜き〜き事
 万葉集〜見ろほ〜く〜みろほ〜か〜ん七〜いへる以ちるへ
 れ〜丁邊をほ〜とのみいひてやう〜射言へつけいへるをうれ空〜
 煙 ちろ〜〜夜を〜の例〜て別の例也思ひやうある事かこれ

ら〜といふ詞の用言と覚〜もある事

推古紀七

摩蘓餓豫云

於朋枳弥能菟伽破須羅志枳万葉一卷〜ら

く山云

相格云

良思吉又六卷〜やちほ〜れ云

偲家良思吉〜れら〜り

りて考きた麻自の如く〜ら〜たら〜〜ら〜きと活く言と思えろ
 れ〜ら〜〜いへるをい〜ひ〜も見さ〜つき猶考ある〜恋
 ふら〜さぬら〜とやう〜いへるを截う語〜ら〜〜いへる〜てお
 きあん此ら〜し〜たと同言の活きからん欤〜然らば〜
 自とは同〜異〜又一種〜なる用き〜し〜詳〜も友鏡底廻影〜
 示は〜〜諸の詞〜ものある中〜これを用く言〜と誰も大
 が〜思ひ〜ら〜〜中〜思ひのほふも〜ら〜こける言あると少
 う〜次霧云聖法云かとの用言あるとちるもの〜て〜のま〜
 ぶと活くか〜思ふ〜
此中巻ま〜友鏡の圖〜て此例をま〜
 といふ〜も〜ら〜は思えれ〜

又 附^言うごの始^言うの音^言たあき幸

右^言いへる如くらしえらくらしきと活くうとも思えられ恒り
あるきと截断連射已然いづれの用き^言ても詞の末とありてとき^言は言
の其本ともあれる辞とも

た	心
と	そ

亦にを等

れいづれの結びつもつて

た^言らしといへるなれ^言こころうこめ言也といへるもこ^言わり也

十九段までついで^言なれとも^言共ら^言より下三段とを^言て^言図せし^言その^言意を

ら^言あ^言ら^言しとい^言ひ^言き^言な^言ま^言き^言い^言へ^言る^言あ^言る^言へ^言し^言例^言を^言い^言て^言恋^言ひ^言し

も^言ら^言ん^言か^言の^言あ^言ら^言ん^言も^言あ^言る^言ら^言ん^言の^言省^言ま^言る^言あ^言ら^言う^言如^言く^言こ^言の^言ら^言し

あ^言ら^言し^言れ^言ら^言を^言え^言ま^言も^言る^言も^言活^言く^言も^言や^言う^言こ^言は^言意^言う^言へ^言る^言び^言て^言お^言を^言え

の^言け^言り^言を^言祈^言良^言とも^言用^言う^言して^言る^言万^言葉^言五^言十^言う^言つ^言こ^言す^言へ^言く^言あ^言り^言け^言ら

す^言や^言と^言み^言え^言る^言類^言ひ^言ん^言く^言あ^言ら^言う^言ね^言と^言それ^言と^言き^言き^言う^言う^言て^言を^言あ^言ら^言し

わ^言ら^言ひ^言古^言事^言記^言の^言麻^言迦^言受^言祈^言婆^言も^言不^言纏^言々^言婆^言こ^言て^言け^言ら^言も^言な^言ら^言れ^言ま^言の

活^言き^言也^言とい^言ひ^言て^言う^言へ^言あ^言て^言な^言ら^言ぬ^言ま^言の^言ま^言り^言こ^言ても^言此^言用^言き^言う^言と^言て^言た

祈^言婆^言の^言言^言派^言解^言う^言ね^言る^言ま^言の^言な^言ら^言う^言れ^言本^言居^言氏^言の^言ま^言き^言こ^言の^言如^言きは

ね^言ん^言ら^言あ^言る^言こ^言こ^言さ^言つ^言へ^言し^言て^言何^言き^言の^言書^言う^言あ^言ら^言し^言を^言あ^言ら^言ん^言と

も^言活^言け^言と^言な^言ら^言し^言の^言し^言も^言な^言ら^言ん^言も^言活^言く^言は^言と^言見^言え^言る^言り^言こ^言も^言あ^言ら^言し

あ^言ら^言し^言々^言々^言し^言た^言ら^言し^言あ^言ら^言し^言を^言大^言く^言下^言の^言志^言こ^言つ^言き^言て^言あ^言り^言あり

々^言り^言う^言ら^言か^言の^言ら^言り^言る^言れ^言と^言用^言く^言音^言こ^言は^言同^言く^言ら^言ひ^言と^言た^言こ^言辨^言ふ

れ^言た^言幸^言も^言か^言う^言図^言え^言ぬ^言へ^言し

言^言こ^言そ^言ひ^言ら^言る^言れ^言の^言音^言と^言ら^言ん^言とい^言ひ^言の^言う^言を^言ひ^言と^言つ^言せ^言る^言説^言も^言あ^言る^言書^言こ^言み^言え^言て^言う^言め

の花^言見^言こ^言う^言を^言き^言つ^言れ^言の^言つ^言れ^言と^言こ^言玉^言章^言を^言う^言け^言て^言き^言つ^言ら^言ん^言の^言つ^言ら^言ん^言を^言い^言づ^言れ^言も^言つ^言る^言と

た^言ら^言し^言と^言い^言へ^言る^言な^言れ^言こ^言こ^言ろ^言う^言こ^言め^言言也^言とい^言へ^言る^言も^言こ^言こ^言わ^言り^言也

十九段までついでなれとも共らより下三段とをて図せしその意を

らあらしといひきなまきいへるあるへし例をいって恋ひし

もらんかとのあらんもあるらんの省まらるあう如くこのらし

あらしれらをとえまもるも活くもやうこは意うへるびておをえ

のけりを祈良とも用うしてる万葉五十うつこすへくありけら

すやとみえる類ひんくあうねとそれとききううてをあらし

わらひ古事記の麻迦受祈婆も不纏々婆こてけらもなれまの

活き也といひてうへあてなぬまのまりこても此用きうとてた

祈婆の言派解うねるまのなるうれ本居氏の時きここの如きは

ねんらあるここさつへしして何きの書うあらしをあらんと

も活けと々なしのもならんも活くはと見えりりこもあらし

あらし々々したらしあらしを大く下の志こつきてありあり

々りうらかとのらりるれと用く音こは同くらひとたこ辨ふ

れた幸もかう図えぬへし

言こそひらるるれの音とらんとといひのうをひとつせも説もある書こみえてうめ

の花見こうをきつれのつれとこ玉章をうけてきつらんのつらんとをいづれもつると

いふ詞の活けるものやうに示せる
 是は似て非なりと辨へし して詞の五の緒にやといふことある
 とらるらばやとはいひさしさいひてたら。文字あまりつくと
 ころなくとあるといはれたる事也なし。さすやのらをもと
 ともるとも活くはそのオ一音らより文としてをばへつれるを
 ること明かれます。はやのらとをのらとは同一のらにへ
 びくはのらを下のし。こつきはのらを上のなつて
 音かれを異なりといふ所をなれす。辨ふべき事さうして
 ついてよいと右のおもひききすへて言のまめはたむ礼呂の
 音をかきこくと覚えしふふへるをいふといふことなれども
 何とこれの詞の下につけてのみいふこととせらるるよといつれを

つねの詞の例とは同一のめものゝぬへと濁る音の如く
 そ發聲は濁音をかしくいふう定りかれははりあひ係し
 しあともはしを濁るといふべきに似たりされこれらとみか
 ひたりたちへはしめをこととたえてたき辞かたあへての
 例にえいへうい然きさうちやうせて發聲は濁音ありともい
 ましく發聲まらりる。れろの音ありともいへううぬを固う
 のいといへし

又 見らしの類とあらしの如きとのいふ

ある書よりうろへきさぬおもたるといふ意の詞をよし
 いへしこれたようしといふへくおもとるれ古言に煎

の文字を以て受るふとを思ふべきくも連用言ありとあられ
たり これをさみまぐはしといふべきあれと五七の句をへつきて文
字のたゞめしきの文字をへつていふ也とのみ心うるを宜しといふ さてあし

引の山のもみちよ志つくあひておちん山ち狐君うこえまぐ 万葉
十九

いへるあはれたむといふべきをのはへるのみあるへし又あもと

しし玉ももやいさきみつられ中よあへまうまぐ母 北とらる

か。しよさやうあるへしゆれた此さての句ある母と乎。此字誤りと

いふ説宜きしゆれまうさるもゆれまぐとた將字よあたる

牟ありとたみれと乎ともうへく母ともうへきこと論か

れたいつきよみんも妨けた 右こつきあはれんすへて此まぐと何まぐ
をいふやうよまぐとまぐと活く言へつは

るも恒のこゝあれい、何まぐとまぐはあと四段の活きたくへつたるも万葉よあるのみ
よて外よはをゆへ見あさらぬ但し続後并ふあれまぐとまぐは花のいろかといふ

えらうこれを全くこの例
と聞えたり猶考ふ倍し 何まほしといへるも何まぐほしといふへ

きをこゝその言の省られたるのみなるを

又

古事記十一卷 平 三 那賀那加佐麻久を汝之將泣あり あつ 麻久を牟

といふと同意にて麻志といふ詞ある下二語をつぐんとて麻久

と活かしゆかありとあるをなごともき解説してことに明かる

辨也然るこかくいよとを辨をみかうともゆれををゆれをを思

ひとり誤りて麻久と牟とたはたひとつ詞を延約の異ある乃み

たりといふ徒もあめると古語の意よりあをぬえさるものよて右の

解説の意こもゆへにうかすぬこゝそうし記傳をよくよむへし麻

久と牟とは同意とはわれと同語とをなす又まゝとまゝとを
 同語とわけて活きさぬれ下へのつけよらうてその用く音れ轉る
 ことを申へ辨へたることいふ詳あるものをやめて記傳の次に
 此例とひき出て可さあらむ下へつくときを辨久といふ善し無し
 かねをよ久那久といふも同じといふこの例証をひとよるよまか
 らぬやうと思へるいふこといふ此まゝとわれいしよしあしあど
 とはその用きさぬ元來も同一といふ其よしをばかちこそそのむ
 すひつてまゝぬへし上よこそとあるときをすゑよ必へたれよ
 だれなだれとやういふ詞もそのまゝの格とはいふこと
 してこれ上よこそとあれをすゑを必まゝと結ふことあり

とつたへしよしあしのまゝひありせよこそそのむびひのまゝ
 まゝれといふへたれとあれいふはさて又倍しよしあしあど
 の音つて截断言よりきれるを麻文を何まゝ。物を何まゝ。ふあど
 いひて連射言をもくねゝまゝとすへて可し善しあどと同一
 うらさるところ多しちりぬへみよるへかみとやういふへとい
 えまゝみ見まみとやういふへといふ又よさかさとといへ
 きとまゝとはさういふをいふもあへし又へしよしあし
 かとを連射言のをり可き善き無きといふ定りある麻之をま
 きといふへくたあらぬあとおほよそ友鏡の才四十八段の図と才一段
 の図いをあせせみて辨ふへし但しこれ記傳の意をた下へつくと

をり久の音に轉する所をのみ例してまゝもへくよくあとも同く
 さぬい示せるあるへたれをそ紙あしはひへくひけまゝとを
 くよくあとも久といふとつらも同くさぬなり其よしも友鏡に照あ
 ら明あらんうしされと記傳の例とあはるるをうらうくのみ見る人
 のもくくちあやまりてまゝとへくよくあとも全く同格の活
 き語也あともいせんうそれこころをくくおあまきまといとくく
 しなれくくくまて辨へたれくくなん
さて麻久をもくより麻久年をもと
 より年を同言にうらうは同活にう
 十七段と四十八段とをくくへみてあるる

又

曰字謂字ををえいせんまくとよめるぬくひえた伊布をえいせん

とのへたる其くはさうと延へていへるのみありとも思えられと猶志くは
 のみうなうし又人お母くもいむをのへていへるのみあるへしと
 もかちあめれと然くもはくあるへし古事記傳の説のこくまくと
 とた大く同趣くもあめれとまた同意同語くもあはれまぐといふ
 固よりひとつ別なる活きあるあうみといへる如したくし然らて用
 言より用言へつて例あらまゝまくとやうとすいめといへん
 う是えやれくくく將然言をえ受る用言もつらこく上巻くまぐま
 けくといふ語のこといへる所と考へ合せつへし
今む乃
 又中より此麻
 久と大く意のうよへるまれ年も女と活きてひとつれ用言あれとそ
 せも將然言をうらう例ある紙あまはし
曰いんいひめ取りんそりめあ
 とさいせんいん曰えめ取らん

こらめ[○]やうにいふを[○]は[○]ち[○]お[○]い[○]た[○]ゆ[○]る[○]將[○]字[○]と[○]あ[○]ら[○]う[○]と[○]な[○]あ[○]ら[○]う[○]と[○]お[○]も[○]を[○]れ[○]す[○]て[○]
截断言[○]と[○]つ[○]けて[○]麻[○]久[○]と[○]い[○]へ[○]る[○]例[○]と[○]あ[○]り[○]を[○]ま[○]き[○]て[○]い[○]ま[○]こ[○]ま[○]き[○]ま[○]ん[○]え[○]ん[○]か[○]ん[○]考[○]ふ[○]る[○]し

老らく 見らく

万葉集^{七の}見良久^{スミヤク}少戀良久乃大寸古今^{七の}おいらくの來んとありせ
は[○]か[○]と[○]い[○]へ[○]る[○]こ[○]の[○]老[○]ら[○]く[○]も[○]う[○]ら[○]ら[○]く[○]け[○]る[○]を[○]ら[○]ら[○]く[○]か[○]と[○]い[○]ひ[○]
ふ[○]例[○]あ[○]ら[○]も[○]お[○]や[○]ら[○]く[○]と[○]い[○]ふ[○]へ[○]れ[○]然[○]る[○]連[○]用[○]言[○]よ[○]ら[○]く[○]と[○]い[○]ひ[○]
又老らくの[○]ま[○]ら[○]く[○]の[○]い[○]ふ[○]て[○]を[○]ま[○]し[○]て[○]う[○]け[○]た[○]る[○]か[○]と[○]皆[○]ま[○]れ[○]さ[○]ぬ[○]る[○]
を[○]さ[○]ぬ[○]ら[○]く[○]ふ[○]ら[○]ら[○]く[○]か[○]と[○]い[○]へ[○]る[○]は[○]異[○]か[○]る[○]ゆ[○]ゑ[○]也[○]と[○]さ[○]て[○]見[○]
らく[○]と[○]い[○]へ[○]る[○]を[○]此[○]老[○]ら[○]く[○]の[○]あ[○]ら[○]く[○]ひ[○]と[○]連[○]用[○]言[○]よ[○]ら[○]く[○]と[○]い[○]ふ[○]こ[○]と[○]は[○]つ[○]
ち[○]て[○]い[○]へ[○]る[○]た[○]ら[○]う[○]又[○]を[○]み[○]る[○]を[○]の[○]ま[○]へ[○]る[○]の[○]み[○]と[○]て[○]ら[○]ら[○]く[○]さ[○]ぬ[○]ら[○]く[○]か[○]
との[○]あ[○]ら[○]く[○]ひ[○]あ[○]ら[○]く[○]見[○]る[○]を[○]の[○]へ[○]た[○]る[○]の[○]み[○]あ[○]り[○]と[○]み[○]ま[○]た[○]万[○]葉[○]乃[○]見[○]

らく[○]少[○]く[○]か[○]と[○]え[○]て[○]る[○]月[○]の[○]流[○]る[○]み[○]れ[○]を[○]天[○]川[○]出[○]る[○]み[○]れ[○]と[○]は[○]海[○]と[○]を[○]あ[○]り[○]け[○]
る[○]と[○]い[○]へ[○]る[○]流[○]る[○]か[○]と[○]の[○]例[○]と[○]ひ[○]と[○]其[○]事[○]を[○]い[○]ひ[○]お[○]き[○]て[○]て[○]用[○]言[○]よ[○]て[○]い[○]
ひ[○]つ[○]と[○]る[○]例[○]な[○]り[○]と[○]い[○]ふ[○]へ[○]し[○]され[○]と[○]又[○]思[○]ふ[○]と[○]お[○]い[○]ら[○]く[○]見[○]ら[○]く[○]皆[○]た[○]く[○]
連[○]用[○]言[○]は[○]躰[○]言[○]と[○]い[○]ひ[○]か[○]ら[○]それ[○]と[○]を[○]て[○]ら[○]く[○]と[○]い[○]へ[○]る[○]と[○]て[○]う[○]く[○]て[○]も[○]
か[○]何[○]と[○]老[○]ら[○]く[○]も[○]見[○]ら[○]く[○]も[○]躰[○]の[○]語[○]な[○]り[○]と[○]い[○]ふ[○]む[○]へ[○]く[○]さ[○]て[○]る[○]戀[○]良[○]
久[○]か[○]く[○]も[○]こ[○]こ[○]ラ[○]ク[○]と[○]い[○]ふ[○]て[○]同[○]し[○]語[○]の[○]例[○]と[○]す[○]へ[○]き[○]と[○]や[○]あ[○]ら[○]ん[○]か[○]何[○]よ[○]く[○]
考[○]ふ[○]へ[○]し

又 らくと[○]い[○]ふ[○]こ[○]と[○]を[○]ま[○]き[○]る[○]語[○]と[○]添[○]る[○]も[○]漢[○]文[○]訓[○]の[○]習[○]ひ[○]の[○]み[○]こ[○]を[○]非[○]る[○]事[○]

老らく[○]た[○]も[○]正[○]しく[○]お[○]や[○]ら[○]く[○]と[○]い[○]ひ[○]から[○]ん[○]後[○]と[○]い[○]ふ[○]し[○]
い[○]ひ[○]誤[○]れる[○]か[○]ら[○]へ[○]し[○]と[○]い[○]ふ[○]説[○]あ[○]れ[○]と[○]あ[○]ら[○]ん[○]な[○]ら[○]れ[○]た[○]い[○]お[○]し

えりりことごとくけりし
万葉に老落惜毛とけりしオユラクヲシモとよむべきを誤りよめるものといふれとあいらくといへる詞にして古き也されどこれをあいらくといふべきも久しうなるをコヒタクとよむべきうと申すもあいらくといふ詞の古よりきこゆれその考あるをうし 志りのみならずあゆるをのへたるものと見るときこ
 乃とつてこそをけりし事とやうふみよみこそをあゆるは
 こつたれ雅文ともまづをふれこつたるをも思ひあゆるへきたるを
 たしいとすれくもその連轉言をうけたる見え
上のとてりといへる中
 見らく居らくとる。故のへたるといへるをいらく思へるをおとへら
 くつねといふと全同く同也きといはらくといへるのみと連用言を躰
 といひなしてそれよりといふことをそへたるものと覺きよべき
 てなり考あるをこつた戀良久をもコフラクといふ見良久をも同じいひ

さぬとみれ少くといひ下し又乃といふ辭してさぬこととあ
 う聞ゆる也されと戀良久とあむコフラクとよみてこそ截断言より
 くといふあつとある例といふへき其故をすべてさうくの用き言
 ともの截断言よりといふこと故つけて曰ふをいらく説く故
 とくらくとやうといへるさうふみよみと多うを思ふとこれ
 もふるくよりの一の詞つひあるへく思へる枕也也あるをよ引
 る中よえ立らく恋ふらくかきまの此例といふへく又垂仁紀
 かる自經而死耳をまワナキテカラルクノミとよめるなともあるひ
 とつと言つひのありつるよよりて也ともあつていへるんし

漢文此訓

漢文の書籍といふも和訓といふなるうきりていうて詞の活き誤
 らぬやうにいついもむへきこと也。是をみるにうきふときをい
 の文義をうること。つらたあることあるとのそつれをむうして
 すへて和訓とて物ゆるいみしう意をらひせしとのと覺て
 今のやうに不奪をうたはずん。憾とよみかゝるそれにつける不
 厭の二字をあつべ。とよむやうけひうことえを所なく又欲
 をオボシテ耳聾をヒエテかゝつていへ。詞大くこころをうき今
 のよのよらふれをこよあうみやひやうなり世々なりてをや
 うらうらきことのみ多くありもて來ぬるをこころたためあ
 ぶ人なきのみは古き正しきよみさぬをさうへりての

みそてあきやうにおもふ人さへあめり心あらん人をつむはし
 むらう二つをいへ。凡そ漢字を和訓してよむ。繼^{ツグ}打買進借
 の類をつけりのせりうてりかへりすめりうれり。とやうも所
 よりてもよむへき。告^{ツギ}載棄換^{カハス}勸^{カハス}枯^{カハス}の類もさへよむ。まじりかな
 らんつけたり。のせたりうてたりうたりすめりうれり。と
 やうこそよむへき。又附^{ツク}句立^{ツク}浮^{ツク}頼^{ツク}入^{ツク}の類も。よりてもつちり
 ねむせりたり。うへり。ぬのめり。いまり。とやういひ處
 よりてえさはよめて必附けり。句をせたり立てり。浮へたり
 頼めり。入れたり。とやうこのみよむるき字とも也。
 繼^{ツグ}打^{ツク}買^{ツク}進^{ツク}借^{ツク}の用き言ふある文字載す棄つ換ふ勸む枯らす下二段の活き言ふのみある文字あり
 まじり附句立浮頼入のぬくひを四段も下二段も二うこえたらう言ふ當る文字なり

むろし此訓点のほゆるをち免もおのつううこころれてもあめる近
 き世のえ皆いとみたり也さて將解斯書を解さんとゆるふよよみ
 ても俗ひこととなる也必こを解せんといゆるよよむへき也また實
 若虚まゝ満而不溢をみつれともむなしくきう如くみつれともあふれ
 ぬとやうよよむてもころしみてれともよむてもよしくるぬく
 ひいとおひたし又榮をさうふ。嘶をいふ。とよむなともや
 くられる世となりうても哥よさへ志うよめるもうちまゝまこと
 つたなきさかうも哥よむもうううなともそれともころしといさ
 むろぬさるうよ諾ふ事もほみやうあるをたて漢籍のみ読みうら
 うこのみうたふ徒かといふふともゆるううこく覺字をおほ

ふ。聞字をきこふ。とやうよえもいたぬまをなふよみあつうへうてそ
 れぬをくしきちぬよふもからんえうれえし。此事なりうし。
用言
あう
 てもあつめる世の訓といふものよはいくうたえきこふはし放字をうへよ
 み故をくれとよめる類をみやひやうなるものなるを今を耳とゆき覺ゆるまこよ
 そのいよよきをえうへうてめしきこみこてあきここのやうよ思ふめりその此訓讀
 といふことのむろしよりやううよさしといひて儒書の嘉点といへるよ至りてんむち
 皇國詞とも聞えぬことさへおほしゆれえ和読要領といふ書よそれををいたく賤
 めて山崎式代徒の如きえ古書をよみえ向くと去るもそのよかきよあつゆあうれ
 もその要領者とも雅語の学よえかやうとうりしうれ門の用きえあつゆいよひて
 こをえもたよよ俗ひいたるさぬよものせら多しされえこれらの事も偏よく
 なく古きをあつひて学ひつて其正よき
 よかよえんとこそころさるるをくれ

けせてへめれよりとと連けたよむまゝよき字柄を

上のこころよいへる如く。継名。慰は。打つ。買ふ。進む。かゝ。よえ
 同しうして告名。載は。棄つ。換ふ。勸む。枯る。あくとえ。才四音
けせて
へめれ

ように。とはいわれぬことある。これちち世のもの。よきさやうりよ
 めるもありす。へていたゆる四段の用き。と下二段の活きを辨へおきて
 此字をこの意なれ。その處にて。うくよむへし。といふこと。故よ
 く意は。ちてよまんと。あるへうらぬ。ひつ。二つをいふ。禮記檀弓
 上。曾子以子游之言告於有子。とある。告字つ。つ。つ。或を
 つ。め。又。つ。つ。け。き。を。と。よ。ま。ん。と。詞。を。か。ひ。ぬ。へ。し。これ。を。も。つ。つ。と
 よみて。も。語。と。の。も。ぬ。あり。禮器。と。鬼神饗養徳。とある。饗養。か。こ
 う。けり。と。よ。む。と。ス。し。又。禮器。と。天子諸侯之尊。廢禁。乃。廢。故
 する。喪。大。也。君。於。臣。撫。之。の。撫。字。を。か。て。樂。記。哀。樂。之。分。皆
 以。禮。終。の。終。祭。統。賢。者。能。備。の。備。禮。運。以。治。人。情。の。治。を。ま。ら。ん。

をへり。そのへり。を。め。り。と。や。う。よ。ある。皆。雅。言。う。か。た。の。告。く。
 饗。く。癢。つ。撫。つ。終。ふ。備。ふ。治。む。と。よ。める。え。よ。是。を。何。き。も。う。れ。四。段。の
 活き。とい。ふ。う。は。た。え。て。活。ぬ。言。も。う。ら。れる。所。なる。字。等。か。れ
 を。也。くる。た。く。ひ。あ。る。よ。た。へ。ひ。多。し。あ。つ。とい。ふ。語。か。と。た。處。よ。よ
 り。て。た。て。り。と。よ。む。方。よ。ろ。し。き。り。り。さ。よ。む。え。ひ。さ。と。よ。か。か。ら。れ
 た。て。り。と。よ。む。へ。き。處。あり。よ。く。辨。へ。し。

又 榮える 匂える 小肖える 此類を混してた意得き。た事

才四音よりらり。る。れ。と。用。く。た。上。の。こ。ろ。り。い。へ。る。如。く。も。四。段。の。用
 なる。語。も。も。う。き。れる。事。なる。お。今。の。よ。れ。さ。と。ひ。たる。もの。い。ひ。の。此。辨
 へ。か。き。く。せ。り。れ。志。は。し。や。應。神。紀。其。形。如。韞。是。肖。皇。后。爲。雄。裝。之。

初 其形如韞是肖皇后爲雄裝之

負^{ハキ}兩^{ラウ}肖^{シウ}此^チ去^{キョ}

故^コ稱^{シヨウ}其^キ名^ナ

去^{キョ}あるミナリをすへてあやまらうみ改め肖

此^チ去^{キョ}阿^ア叡^{エイ}ある處^{トコロ}へ里^リもをひとつ補^ホひさへして肖^{シウ}をさアエリと

める一本^{イツポン}の近^{チカ}き比^ヒいて改^カらうるをかりくうれたきこととそひへき

五十^{イソ}音^{オン}の中^{ナカ}より四^シ音^{オン}をりを受^ウるたたく計^{ケイ}せてへめまの六^{ロク}文字^{モンジ}のそれ

も四^シ段^{ダン}の活^{カク}言^{ゴン}ともちるり限りてあそられ也行^{ヤク}う四^シ段^{ダン}の活^{カク}きかきまて

えをでとは受^ウまききこくわりもよりあるきをや然^{シカ}るりかいる一

本^{ホン}のいてきうるるを日本^{ニッポン}紀^キたれとゆらう言^{ゴン}してえそれよりれ

して才^{サイ}四^シ音^{オン}派^{ハイ}でとうるることすへて下^ゲ二^ニ段^{ダン}の活^{カク}きなるえけせでね

へめえまの十^{ジュウ}音^{オン}よりうて皆^{ミナ}あるへきことゆらう思^{オモ}ひてり此^チ告^{コク}

けり撫^フてり終^{シュウ}へり治^チめりあといひうよみあう候^{コウ}

十行よりうてその非を指さた右の外に

まうく意^イえり任^ニせり束^スねり榮^{エイ}えり流^{リウ}まり植^{シヨク}まり

なといえん造^{ゾウ}語^ゴとみかきりきありまう候^{コウ}にまら

やうといひころむらやうたりあひことをあせそ抑^{ヨク}應^{オウ}神^{シン}紀^キの肖^{シウ}えアエ

夕^{セキ}へりとよめろこそか母^ボ正^{セイ}きこてをりれ思^{オモ}ひまこ幸^{サイ}かりれ

ある人^{ニン}向^{キョウ}也^ヤ行^{キョウ}のえを里^リと受^ウる事^{コト}たうは万^{マン}葉^{エフ}十三^{シヨウ}つし花^カ爾^ニ本^{ホン}造^{ゾウ}越^{エツ}賣^{ヤク}作^{サク}樂^{ラク}

花^カ在^{ザイ}可^カ造^{ゾウ}越^{エツ}賣^{ヤク}叙^{シヨ}母^ボと見えたるをいふ小^コ答^{トウ}ともうみ中^{チュウ}卷^{クワン}の也^ヤ行^{キョウ}もえの条^{ジョウ}とい

へる如^ニくさる語^ゴの考^{コウ}を別^{ベツ}にすへきたり今^{イマ}いさう示^シさる造^{ゾウ}越^{エツ}賣^{ヤク}也^ヤ計^{ケイ}のつまれるのみか

るへしその故^コを榮^{エイ}ゆる也^ヤ行^{キョウ}下^ゲ二^ニ段^{ダン}の活^{カク}きかれと又如^ニ行^{キョウ}よりうてさうやうんさうやうさか

とも用^{ヨウ}く言^{ゴン}也^ヤ其^キよりうみ上^{ジョウ}卷^{クワン}さうやうの条^{ジョウ}いへる如^ニくして白^{ハク}ふとつれ波^ハ行^{キョウ}は活^{カク}

く言^{ゴン}の也行^{キョウ}下^ゲ二^ニ段^{ダン}より用^{ヨウ}くるは万^{マン}葉^{エフ}十九^{ジュウ}つし春^{シュン}花^カ乃^ニ爾^ニ本^{ホン}要^{ヤウ}盛^{セイ}而^ニあることとまるへく

その一^{イツ}回^{クワン}えとよむと活^{カク}へきことより右^{ミドリ}の榮^{エイ}えのさうやうと用^{ヨウ}く例^{レイ}しかわ

清^{セイ}え若^{ニク}えあとの何^{ナニ}れもさうやうと活^{カク}へきことより若^{ニク}やうさうやうと用^{ヨウ}く例^{レイ}しかわ

准^{シュン}へて曉^{キョウ}るへし又^{マタ}尔^ニ母^ボやうといふ河^カもあれと母^ボも活^{カク}く用^{ヨウ}きもあるよりみれと母^ボや

くと活^{カク}く言^{ゴン}もあるよりへとさうやうといふあきを其^キ尔^ニ母^ボやくと母^ボも活^{カク}く用^{ヨウ}きもあるよりみれと母^ボや

とそその才^{サイ}四^シ音^{オン}よりさうやうの尔^ニ母^ボやるといふあきを其^キ尔^ニ母^ボやくと母^ボも活^{カク}く用^{ヨウ}きもあるよりみれと母^ボや

うしてそのやの二^ニ音^{オン}のつまりてえの二^ニ音^{オン}なることと五^ゴ七^{シチ}の句^クのまうへよりてあ

つらう然^{シカ}るるへいせゆる言^{ゴン}霊^{レイ}の妙^{ミョウ}なる活^{カク}用^{ヨウ}ことと五^ゴ七^{シチ}の句^クのまうへよりて二^ニ

音^{オン}を一^{イツ}音^{オン}つてむる例^{レイ}をいへる佛^{ブツ}足^{ソク}石^{シヨク}哥^カ伊^イ波^ハ乃^ニ宇^ウ須^ス乎^フ都^ト知^チ布^フ美^ミ奈^ナ志^シ阿^ア乃^ニ祁^キ留^{リウ}良^{リョウ}

假字つうひのみうれて井。テと物にへき仮イ。テとわつらつらつら本
 も出来らるる仮のみ見てあやしきよみさぬうかイシテとらよむ
 へだれあゝあを語をかきだともいふめりそをかうくよささか
 しあきつらよても思ふへしむうしを漢文の訓といふものもこの力雅
 言ようかへらる、限りをいうてと意あつらひせし物あること明とし

唯字仮いしてとよむ幸

ひとせある人の向ひて禮記曲礼「唯而起」玉藻「唯而不諾」かといへ
 る唯而をイシテとよむを字音うらうさるる内典「唯然をイシ
 カリ」とよめれを字音「あゝさるるやうなり」いりよといへりし「い
 へてイシテをいしての訛をいんさてい。たも。あ。と。う。よ。ひ。て

つゝみて上たる人「いへ申声」そ祝詞なりと小称唯とあると同語
 たりといひ「幸ありき」後ある人の論めてとら猶字音なる
 を真ひき「あゝい。い。い。あ。あ。い。い。ひ。又。う。か。え。井。イ。と。う。く
 を正しといへしといひしをもいて「き事」思ひ「う」と近き比
 漢兵音圖といへる書「出たる考をみれ」唯字を韻鏡「檢はる」
 合轉「はあれ」才四位也行定位「あれ」か同井。「う。い。い。なり
 さて此字音と古言「いへ」の声とおのつらう「う。あ。へ。る。あ。へ。く。あ。え
 るくを和訓「あゝひなる文選註「唯々謙應也といへる」と御國「ての
 いへ」の声の「いへて阿伊字衣於の音」ある例とをいひあもはれ
 え也さてイシテといふえそのいへるの声をえうれ依行変格活言の

為るといふてをくくせらるるをへし
くくの声此等と於乎輕重義あり
くくといへり又内典の唯然といふ

つふに

坐字振つみすといふ事あり づみを躰言たる為といふ用言し
て活らせるなり づみといふも悪行のみあるは外の外よりさ事
ころき所あきをづみあしといふるこてもあるへし何ても凶事をいふ詞とくろえ
て罪字のなりむことなるれそのさき事古華記傳三十卷の明辨あり

かもに

醸字をうもはとよむべきとくかみはの訛たるんうみをかま
んうみうむうめと麻行四段の活く語たるをその連用言をを例乃
躰言といひあして由て為といふ詞して活らせる也 そのくむといふ詞の例証
も底晒影し出せる如し其

中にも神功紀なる伽綿蘆おほみきまうくといへる
まことし明の四段のまうくをなる事此まらる証也

たみは

罔字かををみはと訓けるよつきてもやくおもひよりしやうこは
もかめはの訛たるんそのかめと麻行下二段の活きて語意を
あかつらさうくはるやうれ詞なり宇津保物語のあはぬく
へまひてたいめんたまさうりゆるはいふなめさるはぬ侍りせん
といへるこれ也これをを例の連用言かめを躰言といひあして
それを例の為とて活らせるなりくかみひき然きともはる人の
あれを罔を亡無と同じあしあきかくと活く語に當る字な
れも重みは好みはの例なるへしといへるもいれたるやう也

但しあめ。かむるといふ詞漢字にては茂如かといふ當りて並字の意
 の詞と注きさぬと同一しされと其字の意よりたといふも無禮
 の二字又輕侮かといふあたるとも此あめ。のなめかとも同一し
 意からん故かといふて用きぬをみひりもひあみひあま皆
 同一幸なり

けみひ

閱字をなみひいよむられえけまんけみけむけ免と活く言
 あるもいひも字音にて々んすといへるやうく轉したる
 こそいん閱字にあら音をなけれと按するに檢字派けんびと
 よむそれをなぐるめてけみひといひ

檢大韻鏡より一咸攝の文字あり
咸攝の字もすへてその韻をま。

みむめもの音にあたる
 のみ例もはくあことなり **けみひ**つしうとこのおのつうとある詞の如く
 えもて來こつてはひいその音いゝ異なる字にけへその字の訓
 こして用る事もありうるなるへし猶ごに辨へおくをさ
 を閱と檢と字義も同一きこもいひられと和訓といふものをも
 とさぬくようつりもてめくものうとていへるの例あること
 なるされえうのいふ皇國字にことりあらん人といかともい
 えあるへしたし孟子といへる書に關市譏而不征とある譏をも
 ケミシテといよむめものつきて或説に異視^ケとて怪しめみそなえし
 吟味ける意といふ説あれと用ひかこし孟子は譏をミソナシテと
 よむよりえケミシテといめるうとまはまるとこの詞のおろ

えたりんうういへる如くあるし

あいに

弑字はあいに訓むる字音はういへる又ういへるのふく

もういへるういへるあいにのふくありこみあいに然らる

例の佐行下二段のうて異なることとあき詞たれとかり文より

ても同行愛格の用き詞の如くこそ今もあはくあやまりよむか

そえあいにあいにいへるといふえよるしあいにいふえよるい

訓る処もあいに改むへしこれをもあにせんとあにるといふ用言

といふの音便こそあにるなり古事記に伊能知波那志勢多

麻比曾まゝ奴須美斯勢年とありこれを傳十卷に命莫死賜

ひそありあにせえ令死ナセをつめたる也云書紀垂仁巻かゝに弑を

しせと訓るも是也といひ又ころを斯勢といふといひ又殺字

死字の音をか思ひまうへるとある此辨よく意えおくへち也とあ

あにせをつめてあにといふへれをあにせえあにせよといふ

むといふ詞をと思えあにといふあにといふあにといふ文字

弑字音と此字にあにる皇國言とれのつうう似りよひたるよと

よといふ雅言といふゆゑ佐行下二段の用き言といふよとたきり但し

漢より弑字はつうう臣とて君を害はるやうなことをのみつう

めるは佐行下二段に活きてあにるといふ雅言とあにかきれらね此

雅言弑字にまゝとて當り難しにへて雅言といふといふこゝを命

つらる^ハいへる^{コト}おのつら^ク漢土^{コト}死^トいふ^{コト}よへる^ハその^まい
 ぶ詞を活^クいへる^{コト}と^ハいふ^{コト}と^ハいふ^{コト}て^ハ奈行の轉^シも^ハ用^フふ^{コト}も^ハおのつ
 り^ク然る語となり^テ依行の^ま用^アれ^ルも^ハ然^レせ^ル詞^トある也^ノく自
 然の言使^レ然の語^トこ^トる^{コト}例^セも^ハ奈行^{コト}て^ハね^ぬぬ^ルとい^ふも^ハ身
 つら^ク寝る^ハい^ふ詞^トある^{コト}その^義意^モ同行^オ一音^{コト}も^ハて^ルそ^レを
 活^キ言^フとい^ふも^ハ依行^{コト}つ^ラて^ハあ^んあ^しあ^はあ^せとい^ふ此^トに
 え^ウれ^ハ今^ノ寐^ノ志^ヲむ^ルも^ハい^ふ詞^ナら^ウ如^シされ^ルも^ハ志^ヲぬ^ルも^ハつ^ラ文字
 二^ハつ^ラる^{コト}死^一字^ヲを^ハ虚^ニ用^アる^{コト}も^ハ此^一字^ノ意^ヲ志^セも^ハ令^ニ死^ス乃^ニ
 字^ノ意^ヲある^{コト}つ^ラて^ハあ^んあ^しあ^はあ^せとい^ふも^ハ漢^ノ文字^{コト}今^ノ死^ノ二字^ヲ
 あ^ル詞^ノ中^ニよ^リむ^{コト}つ^ラある^{コト}も^ハ依^レ行^{コト}志^ヲぬ^ルも^ハ志^ヲぬ^ルも^ハつ^ラ。

い^ふ詞^ヲを^ハ更^ニ使^レ然の言^ヲ用^クして^ハあ^んあ^しあ^はあ^せとい^ふへ^キそ^レを^ハ切^リて
 志^セとい^へる^{コト}を^ハな^し
 ほう^リい^ふ ほう^チい^ふ
 欲^ニ字^ヲホ^ツス^トよ^むも^ハほう^リい^ふの^訛なら^ん 又^ハほ^リい^ふ下^ニい^ふを^ハま^らち^テ考^ヘよ^リほう^リも^ハ万
 葉^三卷^一も^ハい^ふの^七の^賢き^人と^もほう^リい^ふせ^しも^ハ酒^ヲし
 ほう^リい^ふしか^トな^らば^多く^リも^ハほう^リい^ふほう^リい^ふほう^リい^ふと^ハ用
 く^言れ^ばある^それ^をほう^リと^ハ例^ノ連^用言^ハ射^言い^ひな^して^ハ又^ハそ^レ
 を^ハ依^レ行^ノ変^格の^爲る^{コト}い^ふ活^キも^ハせ^ルも^ハの^思を^ハ依^レ行^レた^此欲^ノ字
 い^つも^ハい^ふホ^ツス^トよ^むも^ハ空^シか^らい^古き^よみ^もも^ハい^ふも^ハお^ほい^ふ
 と^ハある^{コト}も^ハ有^リある^もや^まか^へき^あら^れる^もを^ハあ^らぬ

じよういふをり也又ほつはていふゆほり。の訛なれをみつう
 かとといふこゝありさて又山青花欲然たゝの欲を只んと
 よむへきとろ也うく同じ文字うて殊に同じ意にてもうかこは
 くとこかたつくとものなちめたゝむうしの訓読にといふ
 き幸おほりきうくて又欲字ホチとうかつけて欲ス。くう
 もやふるく見えまゝうふり尚考ふるゝはほし。にを訛れ物と
 といふへき欲其故をまう此詞の活くさぬ。頭宗紀。三。淵我保指母能
 波万葉十八。見我保之。久と見えたる。て。志く。志きと活く
 ともあつれを欲字に當る語といふ事。万葉十一。うま酒飲み
 もろれ山。立月の見我欲君我うき。のおとほると見えたる。て。志るし

然るゝ之を知。通へる例少う。れ。枕本刀を万。八。麻久良多知。うなる。故官本。て
 之。豆。うき。又。九。歩。を。加。志。又。十。針。持。を。渡。流。母。志。又。天。地。を。多。之。と。り。取。持。を。同。卷。九。白。玉。を。手。刀。里。母
 二。八。阿。米。都。知。三。阿。米。都。之。と。し。う。け。る。か。と。か。は。あり。此。ほ。し。も。ほ。ち。と。通。音。せ。は
 を。う。れ。依。行。変。格。活。の。爲。して。活。う。せ。る。もの。も。う。つ。を。思。え。れ。ぬ。う。した。く。し
 爲。して。ま。ら。う。れ。は。す。へ。て。連。用。言。を。う。る。る。例。あり。ほ。し。の。し。を。截
 断。言。な。れ。て。其。例。異。あ。る。ま。ら。う。れ。や。と。い。ふ。こ。ら。れ。と。形。状。言。二。種。の中。に。友
 鏡。友。鏡。オ。志。き。の。活。き。の。方。あ。る。語。と。も。そ。の。用。き。の。轉。声。と。も。故。を。ふ
 きて。深。淺。か。と。を。ら。友。鏡。オ。志。き。の。活。き。の。方。あ。る。語。と。も。そ。の。用。き。の。轉。声。と。も。故。を。ふ
 志。き。の。活。き。の。か。と。なる。詞。と。も。う。て。截。断。言。の。何。し。と。い。へ。る。う。て。て
 あ。か。ら。さ。ぬ。し。の。ま。や。う。と。い。ふ。く。き。の。活。の。を。あ。れ。と。よ。ま。い。へ。る。例。あ。る。幸
 といへる。相並へるなりされ。あかぬ。や。う。れ。に。な。さ。う。な。い。へ。る。例。あ。る。幸
 上。長。々。夜。といふ。詞。の。い。せ。を。ち。考。合。せ。て。も。知。る。へ。し。され。て

ほしといへるびやうて躰言の如くもせるものなるふよりてそれをとら
の佐行変格の活き言とある爲して活うしてほしはとらひふこそあ
らんとも思えらる也かほよく考ふへし

字音かうらうて活き語とされる例もある事

物語書のぬくひこそそそきてさうそくかといへる詞いとおほし
うつは梅花うらよきうかおらうきりかくさうそくせてうけらふよそそそけ
おあけて又そそきあつまり枕冊子とくきぬかこことくそそそきた
るあすへてあ
ゆるたもと装束ゆるよて字音なれと束字の韻のクをや
うてかあ久けと用うして装束ゆるをいへるひとつの詞となりよこ
るたあつし
そのくうれういまみといふ詞のみのまみむめと活用し何こつといふ
詞のたちつてと用いたるひたあやしきこちゆるを外國乃文字
の音れやてこの活き言となりたるをいへるちやううらひやさて枕冊子乃男のう
ちさうあひ物よくいふききたるものいみたれといきつうしとあるさうひた猿樂と

いふことを活うしたるなるうてたさうきとあるへきを音便といと轉してさうよ又
ひと轉しててはひふへと用くやうなれるよやと思えられ又さよたつてこと
猿といふよくひふくうたんといふことをつけていふよやと思えたるさうをさう
ひふといへるもさるうくことよはあてうくひふをりもさるうひ事の音便とやいへ
くかんか母よ
考ふへし 漢字音此世々をあるまにこの詞のこくあゆむやうよ

かされる事躰言よかすあうらおほる飲用言よはへくるもいてきよた
る也これそののこく靈のゆきまふ國のぬれあといたま
料理をらり
ふれと活う

せろ如く俗言よたあひ
くひ尚これれとわり
まくれもて進えうら文の訓読よえうへりて用ひうこ
うあゆむなりかほ
ほくくはかといへる詞のほくえはへきことち
きと事長なれをえよといえん
こと別り月州と名け
たる書よいへるう如し

訓讀の事

漢文の訓読といふよつきて用言等れ事を固よりよてあゆめ何れ

といふ海はくき事とも猶少うねとなく其中にてむと二をい
 ひつむ下れちうき世はみやひやうなうぬとらるものにて其文章
 の義脈を由へあうに因ま望へどあやまるへきよみさぬ又ふつこ
 ここの意の聞え文てうるまの嶋人らひたらんぬといひも引いて
 つへきたまひ多し何々々々し云せまうらたとやうよや古き
 よみよはよみふきしぬらひをちちとくく除きていみじぬよ至
 りてえはへてコトといふ言ことを皆つけはしてこそくあうよむ
 なをなは却りてふなきことこのやうと思ふ人由へ多うめり傳のせい
 けい經の詩經小雅の蔽芾耳采棠勿剪勿伐召伯所茇清家古字本より
 と沢文童諭下巻云りの如き内典にてと子嶋の真興上人のとして今も傳せられる成唯識論の訓

点と故をカレ於をウへ似をノルかとよみ又云スレハと何々レヌルト
 キハとのをちめはくりなることまていぬやうよとたてよまれたる
 かなとを由えいへと天曆のそのうみ人たられたるそあらんいと雅う也
 たりし今此板本にオイテをライテ或はオヒテかと写しひう
 めたるも少うねとそちのち人あやまりうちああらめ かくふくうふれ
 たる今此よのといつれの書の訓点もよなうくたれ但し古き世の訓
 訳とのみいへくその譯をものせるともより古雅なる詞つきつめたるよたあ
 て又由と只箇え易きをむねとしてよこそしてこいへる由とめの如きと思ひのゆか
 ることそといふ人もあらんうそをなほこつつきをしるもくさといひ詞を由といふ
 ものいひなちこそはあめもくこととてはさうこそその意の箇えさうかといふ
 きを や うろよつけてもうあつうひも言の用きゆぬといまこみされさう
 しむうしこそいと志のまうたれ中今の御代みちく此学ひれ
 やうういへうへうへりもてゆく中ようあつうひのこととらし

もう此契冲法師かと方明め初きんほと人おほくやうなき事と
 思ひたうけなれと今をそれあくるぬ人をいとまれとありこそ誰
 もくあれをまらぬをいさうしきつとちとひめる故らの詞の用き
 此みちをいさうとよくぬとらえんところさぬ人の多くもらぬ
 といふあるそあれも又つひとたその道むらきとひつけて源氏物語の
 ぬくひをあらうといさうらうけつひをやみとれたる世とな
 りての後まぐも此道と推うるをくかりしおもふきかと故みる
 はけつとみとらうと物ほるをばらうふ後の誤あることを忘るやうとあ
 りなんのち^後此^生ひと^{可畏}おそれぬへきわさなうはやとはうちおもふ
 まく城つふやき出たるこそそれすへてとらうく物ほるこそつて

いとくしく誤てる事ともそいふ多うからんよき人よく評め
 給ひてよ

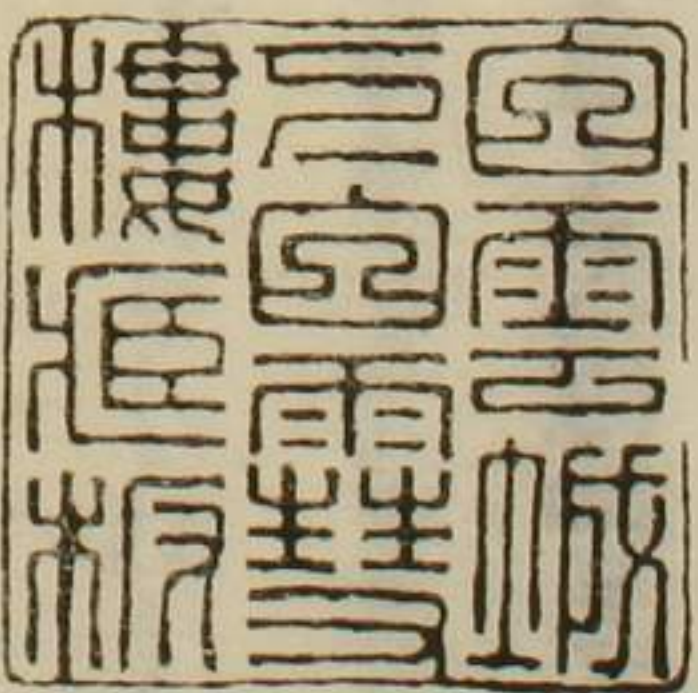
山口栞下巻終

此書ハ文政の初めつうまお無しけし天保四年とふ年
 の夏の末るあらしもそのつふまゝとおほはるも様
 本も、故が那りよとて、此底をあらうてゐるこそこ
 神つふも神ひもせぬほしうとて、あれたい、一
 とを、家すまのつせと、詞通路とつる世は、つ八衢と
 ひつ手無理とたるも、一と、世に、つ詞の、い、此の
 学問の、を、き、つる、處、と、叙、せ、ら、る、神、神、は、お、ほ、ら、し、て

省くふたのほろを種てこふ聊つあまひびき
北不ゆふとこるたふもいほほまふくやう授へ合せ
つゝゝゝのしふぬあまふ月十日とふ日
たの旅の屋とちりて

若狭 義門

天保七年 申 五月 刊 成



東京	吉川半七
同	大倉孫兵衛
同	小林喜右衛門
同	林平治郎
西京	佐々木惣四郎
同	福井源治郎
同	若林茂一郎
同	松田正助
大阪市東區南本町四丁目五十番屋敷	森本專助
大阪市南區心齋橋筋壹丁目六十七番屋敷	松村九兵衛

